

## 開会の挨拶



宗宮弘明 SOMIYA Hiroaki

中部大学学長顧問・中部大学特任教授  
中部大学国際 ESD・SDGs センター長

1946 年生まれ、名古屋市出身。名古屋大学大学院農学研究科修了、農学博士（名古屋大学）。日本水産学会・日本魚類学会・日本陸水学会東海支部会等所属。専門分野は、水圏動物学、魚類生物学、保全生物学等。研究テーマは、魚類の発音システム、魚類の感覚生態学。

皆さん、こんにちは。国際 ESD・SDGs センターの宗宮です。本日の国際会議の開催、おめでとうございます。今年度（2019）から ESD センターの名称に「SDGs」が追加されました。従来の「国際 ESD センター」に「SDGs」をくっつけて「国際 ESD・SDGs センター」となりました。「ESD」と「SDGs」はどこが違うのかとよく聞かれます。今日とはとにかく、その違いを頭の中に入れていただければありがたいと思っています。

「ESD」は、皆さんもご存じのとおり、「Education for Sustainable Development」の頭文字です。「Education」は「教育」ですから、日本語にするなら「SD 教育」です。間に「for」が入りますから、本当は「E-SD」とした方がいいと私は思っております。「Sustainable」は「持続可能な」ですが、「Development」は「開発」と言ったり「発展」と言ったりします。どちらでもいいでしょう。「E-SD」は 2002 年に国連で決議されたもので、「持続可能な開発のための教育」つまり人材育成です。ですから、「E-SD」は主に教育機関向けの運動です。

一方、「SDGs」は「Sustainable Development Goals」の頭文字です。「SD」までは同じですが、「Goals」がついておりまして、この「s」は複数を意味します。目標が複数（17）あるからです。「持続可能な開発目標」として 17 の目標をつくり、2030 年までにそれを達成しましょうと、2015 年に国連で決議されました。これは一般社会向けです。「E-SD」は教育機関に向けて、「SD-Gs」は一般社会に向けてということで、中身はほぼ同じと考えてください。

では、誰が「Sustainable Development」を考えたのでしょうか。この言葉を最初に定義した人は、元ノルウェー首相のブルントラントさんです。彼女は 1982 年の Our Common Future という国連の報告書でその言葉を提唱したのが始まりでした。

ブルントラントさんは、「Sustainable Development」とは「将来世代のニーズを満たす能力を損うことなく、現世代のニーズを満たす開発（Development）」と言っております。

「Development」自体の説明は何もしていません。私は今回この定義を再読して、ブルントラントさんはすごく賢い人だなと思いました。なぜかという、経済学で「Development」の解釈は様々なので彼女はそこをうまく避けているからです。

英語文では、「Sustainable development is development that meets the needs of the present without compromising the ability of future generations to meet their own needs.」となっております。何を言っているのかというと、「持続可能」とは次世代の利益を守ることであると、彼女は「Sustainable Development (SD)」を定義したのです。今日ここへおいでになった皆さんは、「SD」の意味は何かといたら、「次の子供たちを育てること」と頭の中へ入れてくださったら

良いと思います。ブルントラントさんは1939年生まれですから、今80歳で、まだご存命です。彼女は内科・小児科医で、大変賢い評判の良い人です。以上が「持続可能」についてです。

本日のテーマは「持続可能な観光」なので、次に「観光」とは何かについて簡単に触れます。

「観光」の出典は、『易経』の「国の光を観る」にあります（日本大百科全書、小学館）。『易経』は1,500年ほど前の古典です。英語にすると「To see the “light” of the visiting place」で、行った地域の光を観ることです。普通「観光」を「sightseeing」と英訳しますが、原典を忠実に英語に訳すと「light seeing」になります。「light」とは何かというと、「good point」、その土地のよいところです。では、観光地に来た人が観るその地域の「良い点」は何かというと、それはその地域の「独自の文化」だと私は思います。となると、観光は「To see the good point or “culture” of the visiting place」ということになります。

今回の国際シンポジウムの準備の中で変なところに気がつきました。私の英国の友人は、いつもクリスマスカードを筆記体で書いてくれます。ですから、筆記体を読むのが得意です。例えば、筆記体の大文字の「L」と「S」は非常によく似ています。私は、外国人が「観光」ということで「Light seeing」と書いたのを、誰かが「Sightseeing」と読み間違えたのではないかと思っています。今回、この短い挨拶をまとめる中で、実はこれが間違いの原因では？と思った次第です。半分冗談ですけどね。

「持続可能な観光（Sustainable Sightseeing）」というのは、「Sustainable」ですから、やはり将来世代のことを考えないといけません。その土地の文化を観て、観るだけではなく、やはりその文化を学び良いところを取り入れることが、将来世代にとって大事なことでしょう。つまり、観光とは「watch and incorporate good point or “culture” of the different land that will benefit future generations.」だと思います。観光は通常「Sightseeing」と言われますが、本当は「Light (culture) seeing」なのかも知れませぬ。

ここで絶対に忘れてはいけないのが観光の積極面です。観る側は、ほかの土地の文化を観て、帰って、それを自分の土地に戻すこと。とにかくそれを忘れてはいけません。そして観られる側は、伝統文化を観に来てくれということで、例えば、私は高山との地域連携に関係し、観光のことを長く考えてきました。どこの観光地もインバウンドということで観光客を集めています。でも、やはりそれだけではいけないと思っています。その土地自身で若い子供たちが新しい文化を継承し、さらにつくれるような教育をきちんとしないと、絶対に持続可能にはなりません。これが私の考える観光の積極的な面で、そこをぜひ押さえなければいけないと思っています。

最後にもう一度、「持続可能」の意味とその重要性について申し上げます。マイケル・トービスという気候学者は自分のホームページで、「Anything that cannot be sustained eventually stops」、「持続可能でない物事は結局止まる」と言っております。持続可能でない社会はどこかで止まるということです。次の世代への文化の継承と、次の世代と一緒に新しい文化をつくること、この両立をしなければ絶対に止まるのです。「持続可能」とはそういうことを含むリアルな言葉であると思っています。

今日のシンポジウムのチラシにも、「いわゆる『観光地』だけが観光地なのではありません。市民、企業、大学が共に、自分たちの地域の光をみつけましょう！」とちゃんと書いてあります。見つけて学んで取り入れる、もしくは新たな文化をつくっていくことが、本当の「持続可能な観光」の意味であると思っています。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）